

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルにおける出産期のヒツジ・ヤギの母子関係への介入

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5647

モンゴルにおける出産期の ヒツジ・ヤギの母子関係への介入

小長谷 有 紀*

日本における文化人類学の黎明期に、今西錦司と梅棹忠夫はモンゴル高原を踏査し、動物行動学的観点から家畜化のメカニズムを推論するという遊牧論を展開した。しかし、「群れのままの捕捉」や移動のメカニズムについて具体的なデータが提示されたわけではなかった。一方、梅棹は別に、ウシの搾乳について詳細に観察し、ウシの母子関係への介入に注目して「子おとり」というアイデアを提唱した。このアイデアを先の遊牧論と矛盾せずに理解するためには、「群れ全体の捕捉」から「母子関係介入」までに、時間の幅を設定せざるをえない。家畜化の長い過程における搾乳の成立という断面について、梅棹のアイデアを検討するためには、搾乳に先立つ出産期の観察が不可欠であると思われる。

そこで、本稿は、モンゴル遊牧民のあいだで実践されている、ヒツジとヤギの出産期における母子関係への介入作業についてまとめた。詳細な実態調査にもとづいて、子畜の育成を契機に母子関係へ介入することが搾乳作業の契機となっているであろうことを、現在の生業技術体系のなかで示した。と同時に、過去のプロセスの復元についても、哺乳の介添えが搾乳の契機となったのではないかという谷の推論を補強することとなった。

しかし、だからといって、地中海地域の牧畜に関する推論のすべてがモンゴル高原の実態にあてはまるわけではない。むしろ、子畜の育成をめぐる異なる社会環境が異なる技術体系の背景となっている可能性が高い。家畜飼い、子オスの処分方法、群れの雌雄比などさまざまな要素が相互に関連しあっている技術体系総体としての分析は今後の課題として残されている。換言すれば、モンゴルの実態から明らかにされるべき起源論の余地もまだ残されている、ということになる。

キーワード：牧畜，遊牧，家畜化，搾乳，モンゴル

目 次

- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1. はじめに | 2-1 出産期の設定 |
| 2. 出産＝誕生時における母子関係への介入 | 2-2 出産状況 |
| | 2-2-1 放牧中の出産・誕生における母子関係への介入 |

* 国立民族学博物館

- 2-2-2 休眠中出産・誕生における母子関係への介入
- 3. 授乳＝哺乳時における母子関係への介入
 - 3-1 母子関係の正常な場合
 - 3-2 母子関係に問題のある場合
 - 3-2-1 母子関係の認知が損なわれている

- 原因
 - 3-2-2 母子関係の認知を修復するための母子関係への介入
 - 3-3 母子関係への介入の連続性
- 4. さいごに

1. はじめに

牧畜社会を対象とする文化人類学的研究において、モンゴル高原という地域はある特別な位置にあるといっても過言ではあるまい。日本における文化人類学の黎明期ともいべき時期に、モンゴル高原は、今西錦司や梅棹忠夫らによってフィールドワークがおこなわれ、遊牧論の提示された舞台となったからである（今西1948, 梅棹1965）¹⁾。

今西らの遊牧論は、広義の牧畜について起源を論ずるうえで、画期的な指摘を含んでいた。今西は、生来、移動する性格をもった動物の群れのあとを、人が追従することによって遊牧という生業が成立したのではないかと推論し、これを「オーバーアダプテーション（過適応）」と表現した（今西1948:242）。遊牧が成立するメカニズムを論ずるものであり、同時に群れ全体を捕捉するという考え方の提示でもあった（松井1989:116など）。

この今西の遊牧メカニズム論は、家畜の行動からアプローチするという動物行動学的特徴をそなえている。一般に起源論というものは、しばしば、どこ、いつといった場所と時代を特定しようと試みるのに対して、今西の推論は、時代と場所を等閑視することによって議論の自由を得たうえで、家畜化を人間と動物のあいだの関係性のプロセスとして提示するという方向性をもっていた。この発想はやがて、家畜化プロセス論へと構築されるのである（谷1983;1997など）。

今西の推論は、モンゴル遊牧民たちの実態観察にもとづいていた。彼らは、決して草を食べ尽くさせてから移動するというのではなく、ときに他人が移動したあとの草地にやってくることもさえあった。一般に信じられているように、草の消費をめぐる経済的合理性では説明できなかったのである（たとえば梅棹1990:48-50）。今西と同行して調査をおこない、データとアイデアを共有していた梅棹は、今西の遊牧論をうけついで（梅棹1965）。生来的に移動する動物の性格に依存しながら、自らも移動する遊牧について、梅棹はむしろ、牧畜のなかのひとつの類型として想定したのだった。農耕と密接に関係して始まる牧畜と、いわば農耕知らずの牧畜とがあり、後者こそを遊牧として峻別したのが、梅棹の遊牧論であったといえよう。

梅棹の議論には、モンゴル遊牧の実態を、ヨーロッパの牧野経済学的解釈から自由にするという試みが含まれていたようである。また、遊牧的移動について定住化の議論から自由にするという試みも含まれていたろう。世界中で定住化の動きが強まる頃、DYSON-HUDSONが批判していたように（DYSON-HUDSON1972;1980）、移動のパターンによる牧畜の類型論はしばらくさかんであったし（たとえばJOHNSON1969など）、とりわけ定住化の達成までのものさしとして移動をとらえる考え方が支配的であった（たとえばSYMANSKI 1975; JOHNSON 1978; KHAZANOV1984）。これに対して、梅棹は今西の推論を受けつつ、異なる成立メカニズムによる遊牧を広義の牧畜の範疇内に設定したのだった。

このように、今西や梅棹は、動物行動学的観点から家畜化のメカニズムを推論するという遊牧論を展開したのである。そして、それゆえに、モンゴル高原は牧畜論にとっての画期的な舞台となったのであった。

ただし、こうした遊牧をめぐる新しい論理は、決して実証されたわけではない。その後、モンゴル高原は、中国およびモンゴル人民共和国という社会主義圏におさまってしまったため、ここからの実証は不可能とならざるをえなくなった。

梅棹が、モンゴル遊牧民の生業技術に関して実証に成功しているのは、搾乳あるいは乳加工など乳をめぐる生態学的研究である（梅棹1950;1951;1955など）。遊牧民の生活世界のなかで現実に大きな比重を占めている、搾乳と乳加工に関する実態が、詳細に観察されて分析された。

搾乳は、去勢とともに、牧畜という生活様式を成立せしめた画期的技術であると言われてきた。動物を媒介として自然界の恵みを得るなりわいにおいて、動物を殺すことなく利用するという点で、画期的であるとされるのである。

そもそも、牧畜の対象となる家畜は群れをなす動物であるけれども、その群れは決して一様ではない。群れのなかに存在する特異的な関係として、「オスとメスの関係」と「母と子の関係」があげられる（小長谷1993a:45）。前者についての介入は「性をめぐる介入」であり、去勢という技術はこれに含まれる。後者についての介入は、「母子関係への介入」である。搾乳という技術はこれに含まれる。家畜化のプロセスを考察するという文脈のなかに位置づけるならば、梅棹のあつかった搾乳をめぐるモンゴルの生態という一連の研究は、母子関係介入をめぐる生態学的研究の嚆矢であった、といえよう。

乳をめぐるモンゴルの生態に注目した梅棹は、「子どもの隔離は「人じち」である」と結論づけ（梅棹1951:170, 172）、遊牧の起源として、いわば「子おとり説」を考慮していた（小

長谷1990:656）。モンゴルでは、子ウマを捕捉しておくことによって母ウマを搾乳することが旅行記などで以前から注目されていた。それゆえに、子をおとりにして母を捕捉するというアイデアは、生まれやすく、また重視されたのであった。

しかし、このアイデアは、先の遊牧論と2つの点で矛盾しているだろう。第一に、もともと群れ全体への人間の追従が、群れ全体の捕捉をもたらすという推論に対して、「子おとり説」は個体に対する介入であること。第二に「乳」を契機としていること。動物の乳を飲みたいと希望し、乳を目的として家畜化が始まったとは考えにくい。

そこで、矛盾なく理解するためには、時間軸の設定が必要となろう。「群れ全体の捕捉」から「母子関係介入」までに、時間の幅を設定することによって、2つのアイデアは、家畜化の長いプロセスのなかの異なる断面をとらえた介入とみなしうる可能性が生じてくるであろう。梅棹の「子おとり説」は、あくまでも搾乳の成立メカニズムを探るなかで検討されるべきであると思われる。家畜化のプロセスにおける、搾乳の成立という断面については、谷がイタリアの牧夫の行動の観察から、哺乳の介添えが搾乳の条件づけになっているのではないかと推察し、その起源について示唆していた（谷1976:94-96）。ただし、搾乳時期に先立つ出産期における母子関係への介入について実態を把握していないために、乳を契機とした介入の全容が明示されておらず、その点ではいまだ実証に欠けていた。

以上のように、モンゴルは、家畜化のプロセスの再構成のなかで、まず第一に「群れ全体の捕捉」という断面での今西・梅棹の「群れ追従説」を生み、続いて「搾乳の契機」という断面での梅棹の「子おとり説」を育んだ。しかし、いずれも、実証されることのないまま、実証不能な時代を迎えてしまった。現在では、少なくとも民主化の進んだモンゴル国において、

フィールドワークがほぼ完全に自由化されている。今後、あらゆる研究が展開するなかで、こうした生態学的議論も進展することだろうと思われる。私自身が、これまでもっぱら中国内蒙古自治区でたずさわってきた調査研究は、ちょうどそうした時代のはざまに位置づけられるであろう。

本稿は、私自身のこれまでの調査のうち、家畜の「母子関係への介入」に関するものをまとめたものである。モンゴルの「母子関係への介入」については、梅棹がまず搾乳および乳加工をめぐる精力的に調査して先鞭をつけたテーマであり、私はこれをうけて、観察時期を搾乳期以前の出産期へとずらしたことになる。これはきわめて単純なシフトではあるが、このシフトによって、谷の示唆していた「搾乳契機説（授乳時の介入が搾乳の契機となったのではないかという推論）」の風景や、梅棹の重視する「子おとり説（子をおとりにして母をとらえれば家畜化がすすむだろうという推論）」の風景を、目の当たりにすることとなった。これまでもっぱら谷が議論してきた「母子関係介入論」と、梅棹らの観察してきたモンゴルでのデータおよびアイデアをつなぐことが可能となったのである。

本稿であつかうテーマについて、実施した調査は以下のとおりである。

(1) 1988年3～4月中国内蒙古自治区シリングオル盟シリン浩特市郊外

(2) 1989年4～5月中国内蒙古自治区シリングオル盟西ウジムチン旗ジリングオル・ソム

いずれも、中国内蒙古自治区のなかで、定住化がすすみながらもわずかに季節的移動を残すかたちで遊牧がおこなわれているという地域である。時期的には、社会主義体制のもとでの開放政策下であり、家畜の私有分配はすでに終了し、牧地の配分についてもほぼ確定したという頃である。住み込んで情報を得た牧民家庭は、それぞれ当該地域のなかで経済的に恵まれており、社会的にもやや優越的な立場にあった。し

たがって、上述の2つの調査からは、地域差や社会的階層による差などを析出することはできない。むしろ、そうした側面については共通しているとみてよいであろう。2つの調査の違いは、ヒツジ・ヤギの出産期における時期の差である。(1)は出産期の前半期、(2)は出産期の後半期である。換言すれば、両調査を合わせてひとつの出産期を見渡すことに相当する。

これらの調査において得た情報をもとに、「母子関係介入」のテーマについてすでにいくつかの報告をおこなったが（利光（＝小長谷）1989、小長谷1991、小長谷1993b）、全体を通して整理しなおしておくこともあながち無駄ではあるまい。その後の観察結果も若干補足しながら、再構成しておきたい。

なお、母子関係への介入に関する解説に際しては、できるだけ写真を添付したので、参照されたい。牧畜は、農耕に比べると、自然とのかかわりにおいて動物そのものを媒介としており、物質文化の果たす役割が概して小さいといえよう。物質を利用して家畜と接することもあるが、何ら道具を使わずに身体としてかかわっているだけのことも多い。したがって、映像的表現は、家畜との関わりがまさしく身体技法であることを、たとえ静止画であっても筆による解説よりも雄弁に、ものがたってくれるだろう。

2. 出産＝誕生時における母子関係への介入

モンゴルで遊牧の対象となる家畜は、ヒツジ・ヤギ・ウマ・ウシ・ラクダの5種類である。ハンガイ山脈やアルタイ山脈などの山岳地帯では、ヤクがウシに代わり、ハイナクとよばれるヤクとの雑種も加わる。これらの家畜のうち、ラクダ、ウマ、ウシ類は一般に自然交尾にまかされ、出産期は調整されない。しかし、ヒツジとヤギについては、出産期が調整される。以下では、ヒツジとヤギの出産・誕生をあつかう。家畜化の過程を再構成するために母子関係への

介入を考察するうえでは、大型動物よりも先に家畜化された中型動物のヤギとヒツジをあつかうことが、とりあえず重要であろう。

2-1 出産期の設定

ヒツジとヤギは、妊娠期間がおよそ半年と短いため、放置しておくとなら2回の出産をみることになる。家畜頭数を一気に増やそうとする場合に、年2回の出産を積極的に選択することがある（小長谷1994:87）。こうした特殊な場合をのぞいて、ふつう、草の少ない越冬期に食のはそる妊娠期を同調させ、春に出産期をむかえるように調整する。

調整には幾つかの方法がある。もっとも普遍的にみられるのは、 hog とよばれる貞操帯を種オスに付けておくことである（梅棹1990:595など）。種オスは常に群れの中において、発情期をむかえて hog をはずすと交尾が始まり、出産期の予測が可能になる。種オスだけを群れから分離して、別に放牧するという方法もある。これは、種オスの管理のために労働力を必要とするので、労働力に余裕がある場合や、とくに協業体制がとられている場合にみられる方法である（利光（=小長谷）1983b:73）。種オスばかりの群れであるにもかかわらず、その管理が難しいという話は聞かれない。発情期でなければ、種オスばかりの群れの放牧も可能であるらしい。

一般に、中国内蒙古自治区のシリンゴル草原では、ヒツジ・ヤギの出産期は太陽暦で3月から4月にかけて設定されている。3月中旬から4月中旬にかけて出産のピークをむかえるのがふつうである。モンゴル国でもほぼ同様である。現在のモンゴル国東部を支配していたトクトクトール郡王が19世紀に著わした指導書には、「昼と夜がつりあう時に出産するように考えて・・・（種オスヒツジと）一緒にせよ」とある（萩原1999:265）。すなわち、春分の頃に出産期を設定するよう指導されている。歴史的に変容した可能性は残されており、また地域差もあろうが、おおむね3月下旬から4月上旬にかけて

出産期が設定されてきたとみてよいだろう。

2-2 出産状況

ヒツジとヤギは、通常、ひとつの群れにまとめられている。平均して、群れのなかの約25パーセントがヤギである。出産期がはじまると、ヒツジとヤギの群れは大きく二つに分けられる²⁾。ひとつは出産に関与することのないもの、すなわち去勢オス、種オス、二歳未満の子オスと子メスなどから成る。この群れは「ソバイ」と総称される。ソバイとは「不妊」を意味するモンゴル語である。もうひとつの群れは、すでに出産した母メス、およびこれから出産する予定の妊娠メスから成る。こちらは「サーハ」とよばれる。サーハとは「搾乳する」という意味のモンゴル語である。ヒツジの搾乳を実施しない牧戸でも、母および母になる予定の群れは「搾乳する」群れとよばれていた（小長谷1993b:220）。

どちらの群れも、日帰り放牧をおこなう。そして、母ヒツジや母ヤギの出産は、昼夜の別なく起こる。概して、日中に日帰り放牧の途上で出産がおきる場合と、夜間に宿営地で休眠しているあいだに生産がおきる場合とに分けられる。この状況によって、牧民による介入方法が異なってくる。

2-2-1 放牧中に出産・誕生における母子関係への介入

日中に日帰り放牧の途上で生産がおきた場合は、問題がないかぎり、牧民が見守ってゆっくりと母畜と子畜を連れ帰る。牧民は子ヒツジを何げなくぶらさげて持ち帰る。すると、母ヒツジがしずしずと後をつけてくる。こうしてまるで子ヒツジをおとりにするかのようにして、母ヒツジだけを群れから離して宿営地まで連れ戻す（写真1）。なかには、なかなかついて来ないような母ヒツジもいる。そんなときは、子ヒツジの姿を見せながら、誘導につとめる（写真2）。雇われ牧夫の場合は、子ヒツジをつかま

写真1 牧民が子ヒツジを拾うと、母ヒツジが後を追う（放牧途上）



写真2 牧民は、子ヒツジの姿を見せながら、母ヒツジを宿営地まで誘導する



写真3 牧民は、子ヒツジの速度に合わせて母ヒツジとともに宿営地に戻す



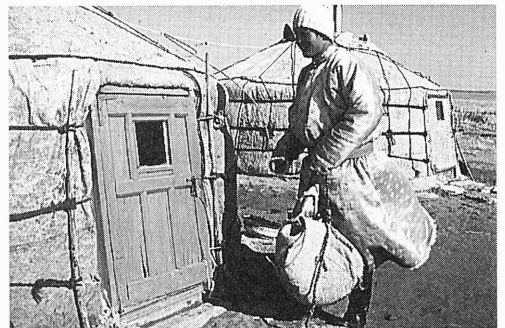
えることなく悠長に子ヒツジの歩く速度に合わせて放牧地から帰ってきた（写真3）。雇われ牧夫には、より丁寧な作業が要求されているのかもしれない。

ともあれ、問題がなければ、まさしく「子おとり」をしている作業風景が、出産期の日帰り放牧時で日常的に見出された。母子関係を利用して、子を契機に母を誘導するという介入が、出産直後から実施されていたのである。このような「子おとり」作業が実施できないような問題がある場合は、悪天候のとき、出産地点が宿営地からかなり遠距離のとき、子畜の容態が悪いとき、母畜がまったく子を子として認知しないときなどである。こうした問題のある状況下では、オートとよばれるフェルト製の袋状の鞆に、子畜だけを入れて持ち帰る（写真4）³⁾。

このとき、母子関係は一時的に絶たれることになる。子畜だけが一足先に宿営地に運ばれたのち、母畜はたいいてい群れとともに帰還する。一時的に絶たれた母子関係をとりもどすために、牧民がする作業はいたって簡単である。子たちをならべて鳴かせて置いておくと、群れから我先にと母たちが突進してくる。母子のあいだで相互に認知しあう関係が樹立しているかぎり、母子は自律的にペアにもどる。

ただし、母畜がまったく子を子として認知しないときは、母子のペアがつかれない。牧民の側で、母畜を特定している場合と、どれが母畜

写真4 牧民は、子ヤギたちをフェルト製の袋に入れて宿営地まで運ぶ

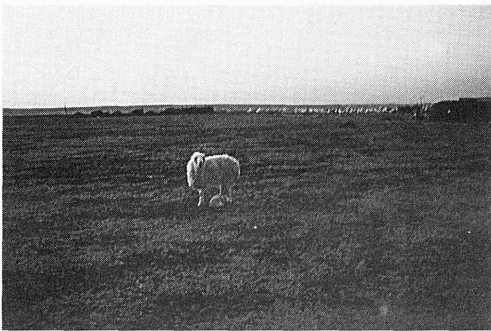


かがわからない場合とがある。いずれにせよ、その母畜は「ゴロンコイ」とよばれる症状を呈しているとみなされる。ゴロンコイとは、嫌っているというほどの意味であり、母が子を嫌っていると称すのである。こうした「子嫌い」現象はしばしば見受けられる。上述の「子おとり」作業において子ヒツジを見せなければ誘導できないという状況もまた、ごく軽度の子嫌い現象といってよいと思われる。

2-2-2 休眠中の出産・誕生における母子関係への介入

出産期になると、勤勉な牧民は夜間に宿営地を見回るものである。社会主義時代にはこうした見張りの作業が義務づけられていた。群れは、夜間の休眠時には放牧時に比べて密集している。この密集した群れの中で、出産は、より周辺部でおきる傾向がある。ヒツジやヤギのなかには、出産が近づくと群れから遠く離れてしまうものもある（写真5）。ウシでも隠れて出産することがある。またラクダは妊娠すると早足になると言われている。これらの行動および行動に関する認識はすべて、生来的に群れる性格をもっている動物であっても、出産は群れから離れる行動であることを指し示している。群れから離れてでも母子がペアでいることのできる環境をととのえることによって母子関係が築かれるのであろう。

写真5 群れから離れて出産をこころみる母ヒツジ



夜間出産につづく牧民の介入は、ふつう日帰り放牧の出発時に始まる。日帰り放牧のために草原へ出かける時点で、母子ペアを宿営地に残す（写真6）。牧民はまたも無造作に子ヒツジをとりあげ、持ち運ぶ。すると、またもや母ヒツジがこれに追従する（写真7）。夜間の宿営地での出産の場合でもまた、「子おとり」とよぶことのできるような作業が繰り返される。ときに、群れ全体の移動に気をとられて子ヒツジを顧みようとしないう母ヒツジも現れる。その場合にはやはり執拗に子を見せて誘導するという方法をとる（写真8）。それでも誘導ができない場合は、上述と同様にゴロンコイ（子嫌い）と認定される。

以上のように、出産状況の微妙な違いによって、具体的な作業には多様な展開がありうるも

写真6 日帰り放牧へ出発するとき、母ヒツジを子ヒツジとともに居残す

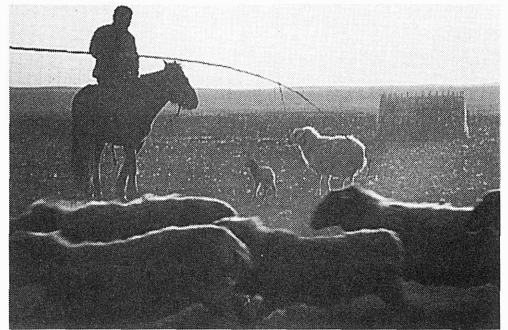


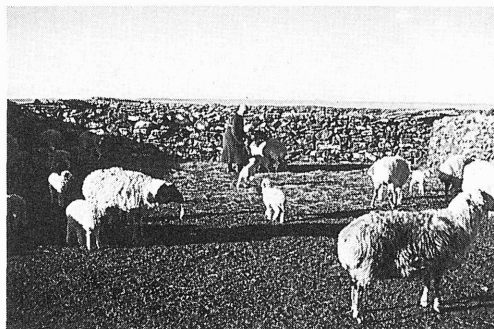
写真7 牧民が子ヒツジを拾うと、母ヒツジが後を追う（宿営地付近）



写真8 牧民は、子ヒツジの姿を見せながら、母ヒツジを囲いまで誘導する



写真9 母子群は、宿営地にある固定施設に收容されている



の、基本的には、母畜と子畜が相互に母子関係を認知していることに依存した作業がおこなわれている。出産直後に母は子をなめて母子関係が確立するので、これをまっけて⁴⁾、牧民はただちに母子関係への介入を始める。その母子関係介入とは、子をとあげて母を誘導し、母子ペアとして捕捉するという作業である。まさしく子おとりとよぶにふさわしい母子関係への介入が、出産期の牧畜作業として日々、ヒツジもしくはヤギに対して実践されている。

3. 授乳＝哺乳時における母子関係への介入

上述したように、出産・誕生の直後から牧民たちは母子関係へ介入をはじめている。そして、その作業の方法は、家畜の母子関係の認知が確立していることに依存している。そこで、母子関係に問題がある場合にはただちに発見されることになる。それが、ゴロンコイとよばれる現象であり、そのような異常事態が認められれば、牧民たちは所定の処方箋で対応する。こうして次なる母子関係への介入が始まる。

3-1 母子関係の正常な場合

子ヒツジ・子ヤギが誕生すると、その母畜とともにしばらく母子はペアで宿営地周辺の囲いなどに收容される(写真9)。春営地にはその

写真10 牧民は、子ヤギを一匹ずつ母ヤギの前に置いて母子間の認知を確かめる



ような固定的施設が設けられていることが多い⁵⁾。ヒツジの場合は、翌日から早速にも子を母とともに母子群としてまとめて宿営地周辺へと放つ。短い距離での日帰り放牧をおこなう。ところが、ヤギの場合は、子ヤギの追従能力が低いと認識されており、子ヤギを施設に残して母ヤギをヒツジ母子群にまぜて放牧する。ヤギとヒツジに関するこうした対処のしかたの差異は、より精密に家畜化過程を考察するとき、重要な意味をもってくるにちがいない。

母子関係の認知に問題がない場合、子ヒツジはつねに母ヒツジとともに、日帰り放牧に出され、囲い等に收容して休眠する。したがって、授乳・哺乳のあいだにほとんど介入することがない。ときおり、子ヒツジを抱き上げてその腹部の張りを吟味する。そうして、十分に哺乳で

きているかどうかを確認する。

一方、子ヤギの場合は、日帰り放牧に出されないの、日中は子ヤギ同士が囲いの中などでたわむれている。そして母ヤギが日帰り放牧から帰ってくると、授乳をうける。このとき、牧民は子ヤギを一匹ずつ母ヤギの目の前に置く(写真10)。子ヤギは眼前のヤギに突進して哺乳を試みようとし、母ヤギはその子を認知していれば受け入れる。この簡単な作業によって、母子関係の認知に問題がないかどうか、この時点で再度確認されることになる。

このように、母子関係の認知に問題がない場合、ヒツジとヤギとでは対応がやや異なる点は興味深い。家畜の種によって程度の差こそ異なるが、正常時においても哺乳がスムーズにすすむかどうかの確認をするというかたちで、母子関係への介入は積極的におこなわれている。

3-2 母子関係に問題のある場合

子ヒツジ・子ヤギが誕生した時点から、異常事態が発生すると特別な対処が始まる。たとえば、誕生時から子ヒツジが衰弱していて哺乳能力がない場合、ただちに母ヒツジを捕まえて横倒しにし、その乳をしぼって子ヒツジに飲ませ

写真11 緊急時、実母の乳をしぼって子ヒツジに飲ませる



写真12 緊急時、非実母の乳をしぼって子ヒツジに飲ませる



ようとする(写真11)。またたとえば、放牧地で誕生して吹雪のなかに置き去りにされた子ヒツジは、衰弱していたので、ただちにそばにいた乳の出るメスを捕まえて横倒しにし、その乳をしぼって飲ませようとしたこともある(写真12)。こうした異常事態はそれほど頻繁に起きるわけではないが、いざ起きたときに相談をしてようやく対処方法が決まるというものでもない。ただちにこうした「緊急時の哺乳のための搾乳」という処方箋が実行にうつされている。すなわち、子ヒツジを哺乳させるために人がヒツジの乳をしぼるという介入は、容易に起こりうると確認されるであろう。

3-2-1 母子関係の認知が損なわれている原因

緊急の異常については先述のとおりである。以下では、母子関係の認知に問題がある場合をとりあげる。

母子関係は音声などによっても相互に認知されているが、哺乳・授乳に決定的な役割を果たすのは子の匂いである。母は子の匂いを嗅いで認めるので、子の匂いが消えたり、混じったりすると、母は授乳せず、結果的に子は哺乳できなくなる。管理上の問題がないとしても、いわゆる子嫌い現象は発生しうる。モンゴル語でゴロンコイとよばれる子嫌い現象が生じるのは、もっぱら「未成熟初産」と「双子出産」という2つの生物学的要因である。

モンゴルではヒツジおよびヤギは、当初は雌雄の区別なく育てられ、生後数ヶ月で夏までにオスの大半が去勢される。メスは満二年をむかえた明け三歳の春に、初産をむかえる。この明け三歳のメスは、ゾサグとよばれ、さほど問題は生じない。子嫌い現象の発生しやすい初産とは、トログとよばれる明け二歳の段階での出産であり、いわば未成熟な段階での初産である。以下では未成熟初産としておく。

私自身の1989年の調査によれば、未成熟初産の場合の約54パーセントが、また双子出産の場合の約67パーセントが、ゴロンコイとして母子関係への介入を要した。そして、こうした初産と双産の2つの原因だけで、子嫌い現象の約85パーセントをしめていた⁶⁾。

3-2-2 母子関係の認知を修復するための母子関係への介入

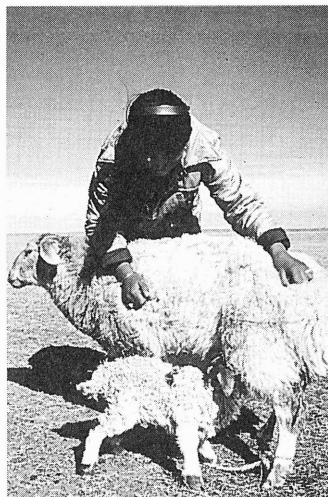
モンゴルでゴロンコイとよばれる現象が生じたとき、牧民は認知を修復しようと努めながら、母畜に対して特定の呼びかけを発する。これは、モンゴル語の表現を活かして「子とらせ」作業といわれており、口承文芸のなかの労働歌の一種とみなされて注目され、また母子関係への介入という家畜管理の特徴をあらわす技術として注目された（蓮見1980，利光（=小長谷）1983a）。

実際には、歌をうたう以前に、まずペアリン

写真13 母子ペアを囲いのなかに入れて歌をうたう



写真14 母子ペアを大地に放置して歌をうたう



グ作業をおこなう。母子ペアを囲いのなかに入れる（写真13）、もしくは、何も障壁のないような広大な空間に放置する（写真14）などとして、母子ペアだけの環境をつくる。囲いのなかでは、母が子を突くことのないように、縄を使って囲いに結びつけることもある（写真15）。大地のもとでは、母が逃亡しないように必ず足かせをはめておく（写真16）。さらに、周辺にはし草や水を用意して快適な環境づくりにつとめたりえて、母畜の尿や糞を子畜の背になすりつけるなどして、匂いをうつす。

これだけの準備をしておいたうえで、母ヒツジに向かって特定の呼びかけをおこない、また

写真15 未成熟初産で子を嫌う母ヒツジが、縄でしばられている



写真16 未成熟初産で子を嫌う母ヒツジが、足かせをはめられている



人によっては歌詞をつけてうたう。ヒツジには「トイグ、トイグ」と声をかけ、ヤギには「チャイグ、チャイグ」と声をかける。こうした音声の違いがあることのほかは、作業上の違いはこれまで認められなかった。

こうした「子とらせ」作業は、母の子に対する認知が不十分なときに実母と実子のあいだで母子関係を修復するためにおこなわれるものであるが、これを養子縁組に応用することもできる。

ウシの場合には、出産が近づくと宿营地付近にとどめることが多い。ヒツジやヤギに比べて、出産の介助というかたちでの母子関係への介入がおこなわれやすいのである。これに対して、ウマやラクダの場合は、人が出産に立ち会うことはまれである。したがって、母子関係への介入は全体として少ない。日頃から介入していないので、母子の認知に問題があることもただちに判明するわけではなく、修復する作業もむずかしい。ウシ、ウマ、ラクダに関して知られている「子とらせ」作業は、むしろ養子縁組であると判断してよいであろう（ガルサン1995、宮田1995）。このように、家畜の種によって母子関係への介入が根本的に異なりうることは、今後、考察に値する。

本稿で焦点をあてているヒツジ・ヤギについては、出産・誕生の時に母子関係への介入がおこなわれ、その作業を通じて異常が発見される

と、つづいて授乳・哺乳の時に、より本格的な母子関係への介入がおこなわれてゆく過程が了解されたことであろう。

3-3 母子関係への介入の連続性

母子関係を修復する作業はそのまま、養子縁組にも応用されるが、養子縁組はそもそも問題が発生したときにただちに処方できる作業ではない。子が死亡してかつ乳の出るメスと、健康な子との組み合わせができるまで待たなければならない。上述したように、子嫌い現象の多くは未成熟初産と双子出産という出産をめぐる生物学的要因にもとづいており、いずれの場合も乳不足をきたしている（小長谷1993:227）。したがって、実母と実子のあいだでの母子関係の修復に努めても困難を伴いやすい。最終的解決方法として養子縁組があり、その実現までに子ヒツジや子ヤギたちは様々な介入をうけることになるのである。

これまで、牧畜社会を対象とする人類学的研究において、家畜の養子縁組という技術は母畜の乳を涸らさないためとして、「乳利用」の観点から解説されることが多かった。しかし、母子関係への本格的な介入をまねいている原因の大半が、出産をめぐる生物学的要因にあり、母畜として十全な機能を果たせないことに問題があることが判明した以上、少なくとも家畜化の過程を考察するにあたっては、「母畜の乳利用」ではなく「子畜の生育ないし飼育」という観点から理解しなければなるまい。

母畜が特定できても、母乳に不足する場合には、子とらせ作業だけをおこなっても子育てとしては不十分な結果に終わるだろう。また、母が見あたらずに不明になった場合も、母乳に不足することに変わりない。乳不足のときには、2つの処方箋がありうる。

まず母畜がいない場合に選択されやすいのは、オグジとよばれる哺乳壘で牛乳をあたえて育てる方法である。ウシの角製の哺乳壘が用いられてきた（梅棹1990:509）。現在では、各種の

写真17 牧民が、子ヒツジの臀部を搔くように教示している



写真18 哺乳壘で育つ子ヤギは、群れから離れて人に近づく



空き瓶が利用されている。ウシの乳をしぼり、これをやや温めて与える。このとき、子ヒツジの臀部を搔くと、飲みがよくなるという（写真17）。本来なら、母ヒツジの腹部にもぐりこんだときに、子ヒツジの臀部は母の鼻面がその匂いを確認する部位である。母の鼻面が子ヒツジの臀部をこするといふ家畜自身の行動に代えて、牧民は積極的に子育てのために子ヒツジの

臀部を搔く。

このようにオグジ（哺乳壘）で育てるのは容易だが、特異的に人に親和性をもつ個体に育ってしまう。群れの周辺を人が歩くと、人に向かって近づき、群れから離れるという習性が身につけてしまう（写真18）。こうした習性は、成長してからも確認することができる（写真19）。これは、いわば餌付けによる人慣れといえるであろう。こうした餌付けを好む牧民もいる（写真20）。また、好むと好まざるとに関わらず、こうした餌付けが思い出をかたちづくり、家畜個体と個人との物語を創出する契機となる（小長谷1991:142）。しかし、母子関係への介入作業としては、オグジによる飼育はあくまでも暫定的なものにすぎない。なるべく、なんらかの乳母をしたてることが試みられる。さらに、出産期後半になると、子を失った母を利用して、養子縁組が実現されるように配慮されてゆく。

乳母を仕立てることをモンゴル語でザギサハという。実母の母乳を飲ませるうえで別のメスから乳を飲ませることをいう。子とらせ作業をしたとしても、子嫌い現象が起きているような母はしばしば乳不足であるため、乳母をしたてておかなければならなくなるのである。

写真19 哺乳壘で育ったヤギは、群れのなかで人に近づく



写真20 哺乳場で育ったヒツジを呼び寄せ、菓子をあたえる牧民



写真21 実子でないため、子ヒツジの匂いを嗅がせないようにする



写真22 実の子ヒツジの匂いを嗅がせながら、乳母に仕立てる



乳母を仕立てる際に重要なことは、実子でない子畜の匂いを母畜が嗅がないようにしむけることである。さりげなく、向こうをむかせたり(写真21)、実子の匂いを嗅ぐように配慮した

り(写真22)、強制的に実子の匂いを嗅がせるようにしたりする(写真23)。

こうした授乳・哺乳をめぐる母子関係への介入は、子育てのためにおこなわれている。ただし、その作業から子畜をとりのぞいてみると、それはまさに搾乳にほかならない。子育てを念頭においた哺乳補助の作業が、搾乳という技術を確立させる契機になっただろうことを思わせ

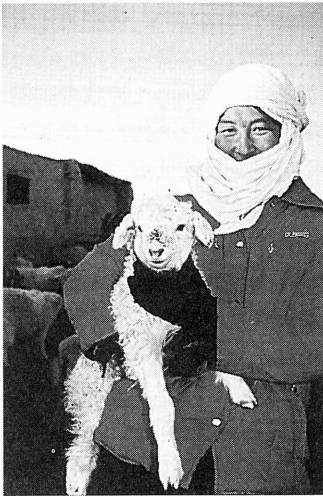
写真23 実の子ヤギの匂いを嗅がせながら、乳母に仕立てる



写真24 乳を飲もうと機会をうかがう子ヒツジ



写真25 子ヒツジの鼻面にある汚れは、乳を盗み飲んでいる証拠



るのである。

乳母を仕立てる作業には、問題が生じることもある。子ヒツジたちは、人が取り押さえてくれるのを待って、いろいろなメスの腹部にもぐりこむことを覚えてしまう。別の子ヒツジのためにしている作業でも、機会をうかがうことになる(写真24)。こうした子ヒツジたちは、母畜に匂いを嗅がれると頭突きをされるので、下腹部にもぐりこむことは避けて、臀部からもぐりこもうとする。そのために、子ヒツジの鼻面には尿や糞の染みがついてしまう(写真25)。やっかいな存在であることが明白となる。したがって、牧民たちは、当面のところ乳母を仕立てていたとしても、最終的にはいずれかの特定個体とのあいだで母子関係を樹立することを企てる。

以上のように、母子関係に問題がある場合の、授乳・哺乳時における母子関係への介入は、状況に応じて多様な選択を経ながらも、最終的には母子関係を擬似的に創り出すことへと向かう。そして、その技法は、母子関係を修復するときとまったく同じである。このことは、それぞれがばらばらな介入ではなく、母子関係の樹立を目的とする一連の作業であることを充

分にうかがわせる。

授乳・哺乳時における母子関係へ介入は、問題が発生していない場合には確認程度の軽度なものとどまる。しかし、問題が発生した場合、緊急時には搾乳によって哺乳補助が実践され、また継続的に問題を解決しなければならない時には修復ないしは偽造してでも母子関係を樹立しながら哺乳を補助するという介入になる。こうした作業の様子は、搾乳の契機に関する谷の推論(谷1983;1993;1995b)を補強することのできる状況証拠とみなしうるだろう。

4. さいごに

母子関係を修復する際に歌をうたうという介入は、モンゴルでは普遍的に認められ、よく知られている。このときの呼びかけ声そのまま搾乳時にも利用されているという直截な事実が観察されれば、出産期における母子関係への介入がそのまま搾乳期における介入の準備になっていることがより明白に了解されるにちがいない。家畜化の歴史的過程を復元できるかどうかはともかくも、現在の牧畜作業を実践するうえで、哺乳を補助するという母子関係への介入が搾乳の契機になっていることが直裁的に理解されることになろう。

ただし、いまのところ、母ヒツジや母ヤギを搾乳するときにはトイグやチャイグの声をかけるという例は管見のかぎり、みあたらない。そもそもこうしたかけ声は、問題が生じた際の特定の個体におこなわれるのに対して、ヒツジやヤギの搾乳は母畜全体に実施される作業である。こうした作業の異相のずれから考えると、かけ声の応用が無いのはむしろ当然のことかもしれない⁷⁾。

ところが、ウシとウマについては、養子縁組のときに用いるかけ声が搾乳時にも用いられていることを確認することができる。ウマの養子縁組をテーマにした文学作品では、グルイ、グルイというかけ声を用いられている(ガルサン

1995:5など)。これは、一般にウマを搾乳するときに母ウマに対して発せられるかけ声である。また、ウシについては、養子縁組のときにオブ、オブと声をかけることが知られている。このかけ声を授乳時および搾乳時に使う牧民もいる。これらの大型動物の場合、搾乳作業はまったく対個体的な介入であり、それゆえに、出産期の介入がそのまま継続されやすいのかもしれない。

ヒツジ・ヤギについては、近年の新たな報告が注目される。民主化の波を受けて変容しつつあるモンゴル国のゴビ地域で、数年にわたって実態調査に従事した伊藤によれば、一人の革新的な牧民が、出産した時点で母メスに命名し、つねにその名を呼んで授乳・哺乳の介添えをおこない、搾乳の際にもその名を呼ぶことで作業を容易にしているという（伊藤1997:45）。まさに、出産期の母子関係への介入が搾乳期へと連続的に展開されており、新しい技法が従来の牧畜体型の中で創意工夫されていく例として注目される。

かけ声の連続性までが認められるかどうかはともかくとして、搾乳の契機として出産期の母子関係への介入を想定することは妥当であると思われる。梅棹の子おとり説もまた、長い家畜化の過程における搾乳技術の確立という断面では、有効性ももちうるだろう。

以上のように、モンゴルにおける家畜の母子関係への介入を牧畜論のなかに取り込むことによって、さらに次のような見解を提示することもできるように思われる。すなわち、家畜の子育てをめぐって発想と技術との間に、ある種の相互関係性を想定し、それを類型化するという見解である。

こうした着想は、もともと谷が地中海地域を中心に展開していた（谷1979）。しかし、さらに大胆にユーラシア大陸全体やアンデスのリャマ・アルパカ飼養にも言及することで、家畜化の過程を再構成する考察にも密接に関与するのではないだろうか。

アンデスでの牧畜は、搾乳の技術をもたない。だからといって、牧畜として不完全な体系をとっているわけではない。現在の経営的側面に注目すれば、搾乳を必要としないという解説も成り立つだろう。しかし、搾乳の契機を考えようとする場合には、なぜ搾乳が発想されなかったかという問題を設定することになる。これまで論じてきたように、人が家畜の子育てに焦点をあてておくことが搾乳の始まりをもたらすという命題が正しければ、搾乳の発想が歴史的に発生しなかったのは子育てへの関心が少なかった、あるいは子育てに困難をきたしていたと推測される。実際に、考古学的データは、驚異的な子畜の死亡率を提示している（稲村1995:202）。対偶命題は同値であることを思いおこしていただきたい。アンデスの例を引用すると、状況証拠は増えることになると思われる。

リャマやアルパカは、ラクダ科の動物である。モンゴル遊牧民によれば、5種類の家畜のなかでもラクダがもっとも養子縁組が難しい、という。母子関係への介入が難しい種であることも念頭に入れて比較しなければなるまい。アンデスのように、群れを囲い込むことが子畜の死亡率を高め、子畜の育成を犠牲にしながら成立してゆくという牧畜技法の体系が一つの類型として措定できるかもしれない。

さらに、ユーラシア大陸のなかに類型はどのように設定できるだろうか。少なくとも、谷のあつかつてきた地中海世界と、モンゴル高原のように遊牧世界の中心地とでは、パラダイムがまったく異なる。

前者では、比較的的温暖で湿潤とはいえ、冬雨型の気候のもと、都市が中心的に存在し、周辺に農耕地が広がり、牧畜と密接な関係にあり、さらにその周辺に遊牧民が移動する。まさに周辺的な存在として遊牧が存在しており、遊牧民は都市へ肉を供給し、自分たちは乳を食べる。農耕地へは糞を供給するなど、交換経済が日常的に成り立っている。一方、後者では、比較的寒冷で乾燥しているとはいえ、夏雨型の

気候のもとで、農耕には不向きでも遊牧には適した草原が広がる。都市は交易拠点ではあるが、交換を前提としなくとも生計は成り立つ。このような異なる牧畜体系のなかで、開発され応用される技法は、似ているようで似ていない。

母子関係への介入においてもそうした差がやがて析出され、技術体系全体との連関性が分析され、類似と相異が明らかになってくるのではないだろうか。たとえば、母子関係への介入を通じて、母子関係を絶つことで群れ全体の凝集性が成り立ち、群れの輪郭が成り立つという太田の推論に対して (OHTA1982)、モンゴルではまったく異なった様相を呈している。

モンゴルでは概して群れの輪郭は曖昧であると言ってよかろう。少なくとも、2つの異なる放牧群が合流すると、その分離にはかなり手間がかかる。私自身は1989年5月、内蒙古自治区シリングル盟において去勢作業のために労働力を割き、ヒツジ・ヤギ群の放牧を女兒にまかせていたため、隣家の放牧群と合流してしまった例を目撃した。当該女兒はさんざん父親に罵倒され、代わって男たちが総出で群れを分離した。群れの輪郭があいまいである理由は幾つか考えられる。まず第一に、囲いの利用が少ないこと。たとえ固定的な囲いを所有していても弱小家畜や悪天候の際に利用するのが一般的である。第二に、所有群と放牧群が違うこと。季節的宿営地の移動ごとに、宿営集団は変更され、そのつど、放牧群が再編成されるため、群れの持続性が小さい。また第三に、群れにおける去勢オスの割合が高いこと。去勢オスの多さも群れのまとまりに大きな影響を与えていると思われる。モンゴルでは、むしろ母子のまとまりがかえって凝集の核となっており (小長谷1991:198)、多くの去勢オスの存在がアモルフォス化を果たしている可能性がある。母子関係への介入から、群れへの凝集性、さらに移動のメカニズムへと連動した技法体系全体が区別して認識されはじめて、差がより鮮明になるにちがいない。

現段階で、西アジアに先行する考古学的デー

タはないものの、今西や梅棹の発想がまったく水泡に帰すわけではないだろう。何よりもまず、モンゴル高原において、動物行動学的あるいは自然人類学的な調査が盛んにおこなわれることが望まれる。モンゴル高原は、ユーラシア大陸の東西をつないだ歴史をもつ遊牧世界の中心地であり、いまなお遊牧が実践されている貴重なフィールドである。そもそも、今西や梅棹が提起した遊牧的移動に関する議論はまだ確かめられていない。また、環境をキーワードとしている現代においては、モンゴルの生態学的な安定性 (ecological stability) がもはや伝説のごとくに語られているにもかかわらず、十分に確かめられているわけでもない (SHEEHY1993)。

近年では、中国内蒙古自治区の定着化過程を復元することによって、本来の移動原理を明らかにしようという興味深い試みが見られる (阿拉騰1999)。中国内蒙古自治区で進行している定着化政策について、馬らが牧地の配分によって牧民の意識が高まり環境維持に寄与すると評価している一方で (MA1993)、HUMPHREYらは、移動の縮小による生態学的危機を主張する (HUMPHREY and SNEATH1999)。さらに彼女らは、生活様式としてのnomadismではなく、生業技術としての移動を強調して、mobile pastoralismという用語の使用を提唱している。とはいえ、移動と草原生態系の関係が解明されたとはいいいがたい。

遊牧に適した草原という環境を維持してきたとされる遊牧民の英知について克明にするために、文化人類学は積極的に、漠然とした学際研究ではなく、的をしぼった形での自然科学との協業を果たさなければならない時期に来ているだろう。

注

- 1) 一般にモンゴルというと近年ではモンゴル国をさすことが多いけれども、本稿では、社会的環境が異なることを区別する場合をのぞいて、モンゴル国や中国内蒙古自治区などモンゴル高

原一帯をモンゴルとしてあつかう。

2) 群れの規模によっては必ずしも群れを分割することはないとと思われる。1988年の調査地では、群れは分割されていなかった。このときの群れの規模は約300頭であり、1989年の調査地では約800頭で群れを分割していた。おおよそ、500頭ぐらいが出産期に群れを分割すべき下限ないしは群れを分割しないですむ上限ではないかと思われる。

3) 放牧中に出産があるとき、当該メスはその場に座り込むので、群れ全体の移動から遅れる。たいていの牧民はウマに乗って機動力があるので、天候のよい場合はほとんど問題がない。1997年から1999年にかけてモンゴル国中央部のアルハンガイ県でフィールドワークに従事した風戸真理によれば、ヤギの場合はオート（袋）で子ヤギが持ち帰られるのに対して、ヒツジの場合はつねに放牧されて帰営するという。そこでは、子ヤギの持ち帰りという方法で、子おとりが実践されていたことになる。

ただし、悪天候の場合には、出産したメスが散在するとそれらを失う危険性が生じることを考慮に入れなければならないだろう。とりわけ悪天候ほど出産個体数が増加するので危険性は増す。そもそも、労働力の軽減を考えれば、出産が間近に迫ったメス個体は、宿営地に残しておく方が楽であるに違いない。にもかかわらず、通常の場合には一斉に放牧に出してしまう。いつまでもりきんでいるといった異常がとくに認められるような場合をのぞいて、妊娠メスはすべて日帰り放牧に出されていた。出産直前の個体をあらかじめ宿営地に残しておけば、自然に母子ペアができる。したがって子をおとりにして誘導するような状況は発生しないだろう。あらかじめ取り置いて管理保護下におこうとしないという牧畜作業上の原則は、人間と家畜との関わりの歴史を考察するうえでかなり重要なポイントであると思われる。

4) アルタイ山脈に住むウリヤンハイ族のもとでフィールドワークを遂行した上村明氏もまた、90年代に入って出産期の牧畜作業を観察してい

る。氏の撮影した映像をみると、母ヤギが子ヤギをなめるまもあたえずに、子どもたちが子ヤギを屋内に回収している。母子関係の確立をまたないという作業のさまが気にかかる。厳寒期の出産であるためらしい。いわゆるUターン牧民でその技術に疑問があること、本来ヒツジに向かない寒冷な春営地であることなどを考慮する必要があるかもしれない。

5) 母子をペアで収容するような固定的施設がない場合には、子ヒツジたちだけを屋内などに収容することが多い。こうした場合には、個体固有の匂いが消えやすく、子嫌い現象が発生しやすいと推測される。同じ文化的原理のもとでも、経済的、技術的条件がもたらす管理の違いによって、出現する現象にも違いがうまれる。子嫌い現象が発生する割合などを具体的に検証し、比較するという考察はあまり進んでいるとはいえない。

6) ただし、どの個体の子を産んだのかわからなくなった「母不明」の場合は、牧民の慣例にしたがって、双子出産だったとみなしている。この調査例では、もとより妊娠していないメスが別の群れに仕立ててあるため、牧民が気づかないうちに出産してしまった個体がいれば、容易に判別されるはずであり、そうした個体が見つからない以上、双子出産であったとしておくのは妥当であろう。

7) チャイグはさまざまな作業のときのヤギ全体へのかけ声にもちいられていることもあり、かえってその存在意義が不明瞭になっている。

文献リスト

阿拉騰

1999 「内モンゴルにおける遊牧と定住化」『北方学会報』6号、9-21頁

DYSON-HUDSON, N.

1972 The Study of Nomads, in Irons, W. H. and N. DYSON-HUDSON, (eds.) *Perspectives on Nomadism.*, International Studies in Sociology and Social Anthropology 12, Leiden, pp.2-29

- 1980 Nomadic pastoralism, *Annual Review of Anthropology* 9:15-61
- ガルサン・チナグ (今泉文子訳)
『草原情歌』, 文芸春秋社
- 蓮見治男
1980 「モンゴルに於ける家畜管理の一面」『モンゴル研究』11:50-54
- HUMPHREY, C. and D. SNEATH
1999 *The End of Nomadism?* Duke University Press.
- 今西錦司
1948 『遊牧論そのほか』, 秋田屋書店 (増補版今西錦司全集第2巻『草原行・遊牧論そのほか』1993, 講談社)
- 稲村哲也
1995 『リャマとアルパカーアandesの先住民社会と牧畜文化』, 花伝社
- JOHNSON, D. L.
1969 *The Nature of Nomadism*, University of Chicago, Department of Geography, Research Paper 118, Chicago
- 1978 Nomadic organization of space: reflections on patterns and process, in K. Butzer ed. *Dimensions of Human Geography*, University of Chicago, Department of Geography, Research Paper 186, Chicago
- KHAZANOV, A. M.
1984 *Nomads and the Outside World*, Cambridge Univ Press.
- 小長谷 (=利光) 有紀
1983a 「モンゴルにおける家畜への呼びかけ」, 京都大学地理学教室編『空間・景観・イメージ』pp.197-205. 地人書房
- 1983b 「“オトル”ノートーモンゴルの移動牧畜をめぐる一」『人文地理』35-6:68-79
- 1989 「草原に生きる女たち」『季刊民族学』50:6-25
- 1990 「原点としてのモンゴル」, 梅棹忠夫著『梅棹忠夫著作集第2巻・モンゴル研究』pp.639-657. 中央公論社
- 1991 『モンゴルの春』, 河出書房新社
- 1993a 「『遊牧論』の現在」『民博通信』60:44-48
- 1993b 「母子関係介入をめぐるモンゴルの生態」, 佐々木高明編著『農耕の技術と文化』pp.217-238. 集英社
- 1994 「モンゴル遊牧社会における経済格差」『農耕の技術と文化』17:73-100
- 1996 『モンゴル草原の生活世界』, 朝日新聞社
- MA, RONG
1993 Migrant and ethnic integration in the process of the socio-economic change in Inner Mongolia, China: a village study, *Nomadic Peoples* 33:173-191
- 松井 健
1989 『セミ・ドメスティケーション』, 海鳴社
- 宮田 修
1995 『らくだのなみだ』情報センター出版局
- OHTA, I.
1982 Man-animal interaction complex in goat herding of the pastoral Turkana. *African Studies Monographs*, Supplementary Issue 1, Kyoto Univ. 13-42
- SHEEHY, D. P.
1993 Grazing management strategies as a factor influencing ecological stability of mongolian grasslands, *nomadic peoples* 33:17-30
- SYMANSKI, R., MANNERS, I. R. and BROMLEY, R. J.
1975 The mobile-sedentary continuum., *Annals of Association of American Geographers* 65-3:461-471
- 谷 泰
1976 『牧夫フランチェスコの一日ーイタリア中部山村生活誌』, 日本放送出版協会
- 1979 「習性と文化のあいだー南西ユーラシアの羊飼いを訪ねて」『季刊民族学』8:6-23
- 1983 「人がはじめて乳を搾ったとき」『季刊人類学』14-2:152-157

- 1995 「考古学的意味での家畜化とはなんであったか—一人一羊・山羊間のインターアクションの過程として」『人文学報』76: 229-274
- 1997 『神・人・家畜—牧畜文化と聖書世界—』, 平凡社
- 梅棹忠夫
- 1950 「乳をめぐるモンゴルの生態 (I)」『自然と文化』1:187-214, 自然史学会
- 1951 「乳をめぐるモンゴルの生態 (II)」『自然と文化』2: 自然史学会, 119-172頁
- 1955 「モンゴルの乳製品とその製造法—乳をめぐるモンゴルの生態 (III)」『内陸アジアの研究 (ユーラシア学会研究報告3)』, 217-296, ユーラシア学会
- 1965 「狩猟と遊牧の世界 (上・下)」『思想』2:10-29, 4:66-88
- 1990 『梅棹忠夫著作集第2巻・モンゴル研究』, 中央公論社

Intervention in the Relationship Between Ewe and Lamb in the Mongolian Pastoral System

KONAGAYA YUKI

Key Words: pastoralism, nomadism, domestication, milking, Mongolia

Recently, C. Humphrey and D. Sneath have proposed an end to using the term nomadism, because the very category of nomadism is loaded with subjective judgments and has ceased to be useful analytically. Instead of the word nomadism, they prefer the term mobile pastoralism, and they argue that mobility is still necessary for pastoralism in Inner Asia, including Mongolia.

The mobility of nomadism has been considered for many years as a low and backward technique of land use. However we are now just realized that mobility and flexibility are a most important key to sustaining the steppe environment. Two Japanese ethologists, Imanishi and Umesao, asserted from data for a field survey of Inner Mongolia in the 1940's that the mobility of nomadism emerged from the characteristics of herds of domestic animals themselves and that the nomadism was a highly developed lifestyle adaptable to the steppe environment. Although their idea of mobility from the viewpoint of ethology is attractive, the micro mechanism of herd mobility has not yet been clarified.

In this article I refer to another idea of Umesao. He analysed the intervention in the relationship between cows and calves at milking and assumed that human beings, by capturing the young of the animals, had come to control the herd in the process of domestication. That is the so-called kidnap hypothesis of domestication.

I do not agree that picking up the young of wild animals was the first stage in domestication. But at a later stage in the long process of domestication, I suppose that the intervention in the relationship between mother and baby animals gave human beings the

chance to do milking. This hypothesis about the invention to the milking technique has been presented by Tani from field data for the Mediteranean world. And I have proved this from field data for Inner Mongolia.

Here, I show the features of the intervention between the ewe and lamb or kid with a number of photographs, at the period of birth before milking. It is certain that intervention with the baby led to the intervention with the mother animal in the present pastoral system in Mongolia. I also argue that the intervention in the relationship between ewe and lamb or kid at the period of birth prepares the conditions of the following milking period. That means that in the long process of domestication the invention of the milking technique emerged from the practice of breeding babies.